



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	オスカー・ワイルド研究 —同性愛とその真相—
Author(s)	山田勝
<i>Citation</i>	Shoin Literary Review, No.1 : 71-90
Issue Date	1968
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# オスカー・ワイルド研究

—同性愛とその真相—

山 田 勝

「あまり空想が真実に近づいた結果、ついにほんとうに実行する気になったんです」  
——谷崎潤一郎「或る罪の動機」——

## 序

1892年1月ワイルドは友人の紹介で、Lord Alfred Douglas を知った。時にワイルドは37才、ダグラスは20才であった。この出会いがワイルドの一生を大きく左右したことは言うまでもない。アルフレッド・ダグラスというのは Queensberry 侯爵の三男で、当時 Oxford 大学 Magdalen[mɑːdlɪn]College に在学中（ワイルドの後輩になる）の美男子であった。二人は紹介されるや否や互に強く惹きつけられたらしい。ワイルドは彼の美貌と由緒ある名前に、ダグラスは相手のすばらしい話術に。こうして二人は友人以上の交際を続けた。ある時はホテルで同棲し、ある時は海辺へも行った。伝統的に倫理観の強い英国人は二人の交際を黙っているわけではない。色々な噂も流れた。しかし誰よりも腹立しく思ったのはダグラスの父 Queensberry 侯なのである。彼は生れつき乱暴者で、喧嘩好きで、借金も多く、妻と離婚していた。そういう父親のことだから Bosie (Bosie はアルフレッド・ダグラスの愛称で、母もワイルドもそう呼んでいたから、簡易化するためにこれよりそう呼ぶことにする) は彼を信頼していなかった。従って父からワイルドとの交際を切るよう強要されても聞き入れるはずがない。むしろそう言ってくる父親を逆に強迫するほどであった。こうなると父親としても強行手段を採らざるを得なくなる。まして生来

乱暴者のことだから尚さらだ。暴力団を使ってワイルドをおどしたり、公衆の面前で恥をかかそうとしたりする為、ついにワイルドは彼を名誉毀損で訴えたのであるが、あべこべに indecency の罪で告発され、有罪となった。結果的に英文学史上不朽の名作となった ‘*De Profundis*’ (1905) や ‘*The Ballad of Reading gaol*’ (1898) が生れたのであるが、ワイルド自身にとっては有罪判決と二年間の牢獄生活は完全なる没落を意味したのである。出獄後彼がどのような生活をおくったについては別の機会に譲ることにして、当小論では彼をこのような破滅に導いたボジーとの関係の真相を追求すると共に、それが彼の芸術生活とどのような関連を持つか考察してみたい。

## 第一章 二人を結びつけた要素

“les hommes sont tous condamnés à mort avec des sursis indéfinis”<sup>(4)</sup>  
——Victor Hugo, *Le Dernier Jour d'un Condamné*——

ワイルドの芸術観は一口に言えば美を至上のものとする事である。この考えは多少の変化はあっても一生変ることはなかった。あれほど謙虚な反省とキリスト教精神に満ちた「獄中記」においてさえ美を重視している点に変わりはない。彼が世紀末の代表的審美主義者になった理由の一つとしてまず考えられるのは彼の野心である。実際彼は大変な野心家であったようだ。若い頃の手紙に<sup>(5)</sup> <sup>(6)</sup> ‘Money and Ambition’ こそ自分の「偉大なる二つの神」(“my two great gods”) であると言っていることからわかるように、大金をつかむこと、上流社会に出入すること、世間から認められることが彼の念願であった。ところで Dublin の Trinity College を出てから Oxford 大学に入学した彼は二人の偉大な教授を知り、その影響を大きく受けるのである。一人は Pater, 他は Ruskin であった。Pater はその著 “*The Renaissance*” から十分判断できるように、審美主義批評家の代表であり、Ruskin は1848年以来続いている “Pre-Raphaelite Movement” の指導者の一人である。若い頃からギリシャ

・ローマの古典にすぐれた素養を持ち、詩に興味を抱いていたワイルドは、自分の野心をこの審美主義運動の中に見出そうと決意したのは当然であろう。それに、世間から注目されることを望んでいた彼にとって当代流行の芸術運動に従うことは正に一石二鳥と言えるのである。華美な服装で街を歩いたのも一種の宣伝であった。こうして次第に名声を得、アメリカにも招待され、ついには世紀末最大の人気者の地位にのし上った。金も地位も名声も手に入れた彼にとってまだ自分に欠けているものは何であったかという、それは「青い血」<sup>(7)</sup>と「美」であった。ワイルドの貴族とギリシャ美への憧れは強烈なものであった。しかし彼が喜んで交際できるにはやはり自分の芸術を理解してくれる人でなければならない。芸術を愛する貴族とか容貌のきれいな貴族という風に二つの条件を備えている者はいたかもしれない。しかし三つの条件を満すものはそう簡単に見つかるはずがない。そのような時にワイルドの前に現われたのがボジー<sup>(8)</sup>なのである。若くて、女性的な美しさを持ち、候爵の息子で、詩を愛する青年——このボジーがただちにワイルドを魅了したのは無理からぬことである。ボジーも又、ワイルドの芸術と話術と（名声と経済力）のとりこになったことは言うまでもない。こうして二人は深く交際を続けていった。

## 第二章 二人の関係

“Art thou Gone so? love, lord, ay, husband, friend!

I must hear from thee every day in the hour,”

—W. Shakespeare, *Romeo and Juliet*—

二人の関係がどの程度のものであったか完全には理解できないにしても、彼の残した手紙や友人の記録から大体の見当はつく。1962年 Rupert Hart-Davis によって発行された “*The Letters of Oscar Wilde*” にはワイルドがボジーに宛てた手紙は合計33通（*De Profundis* を含む）掲載されている。そのうちから興味あるものを一部紹介したい。

(a) My Own Boy, Your sonnet is quite lovely, and it is a marvel that those red rose-leaf lips of yours should have been made no

(9)

less for music of song than for madness of kisses.

— Let., P. 326 (1/?1'93) —

(b) I want to see you. It is really absurd. I can't live without you. You are so dear, so wonderful. I think of you all day long, ...Write me a line, and take all my love—now and forever,

— Let., P. 357-8 (6/?/'94) —

以上はワイルドがボジーに宛てた手紙の一部であるが、これから判断すれば、彼のボジーへの気持は普通男が恋人に対するものと全く変りのないもの、つまり完全な同性愛と判定されて当然である。この点について別に疑う余地はないだろうが、ワイルドの場合、他の同性愛患者のように純粹なものであったかどうか検討してみる必要がある。その前に、ボジーのワイルドに対する気持はどの程度であったか少し触れておきたい。はじめに述べたとおり二人が知り合ったのは、ワイルドは37才、ボジーは20才の時であった。「同性愛的な思慕、過度に強烈な官能的色調の友情関係というものは、男女いずれの性においても思慕<sup>(10)</sup>をよせるのは一応うなずける。現にワイルドが手紙を出している時でも、ボジーは電報でそれに応待していたほどであるし、“De profundis”の次の引用からでも十分理解できるように、ボジーの態度は狂気じみている。

(a) Three months later, in June, we are at Goring. Some of your Oxford friends came to stay from Saturday to Monday. The morning of the day they went away you made a scene so dreadful, so distressing that I told you that we must part.

— Let., p.431 —

(b) When after leaving Goring I went to Dinard for a fortnight you were extremely angry with me for not taking you with me, and, before my departure there, made some very unpleasant scenes on the subject at the Albemarle Hotel, and sent me some equally unpleasant telegrams to a country house I was staying at for a few days,

—Let., p. 432—

他の男友達がワイルドを訪れた時や、彼がボジーを残して何処かへ行く時の嫉妬はたゞの女性以上のヒステリー現象を呈しているし、嫉妬から来る強行手段（例えば自殺するとか言って強迫する）も異常という他はない。ボジーのこう言った性格は環境と遺伝の両面から理由づけを行うことができるだろうが、心理学者でもないし、又当小論はワイルドについての考察であるから省略することにしたい。

さて、若いボジーは仕方がないとして、分別ざかりのワイルドが何故このような関係をいつまでも継続しようとしたのであろうか。真に彼のことを気づかう友人たち幾度となく忠告した。彼の崇拜者である André Gide もその一人である。後に伝記“Oscar Wilde”(1916)を書いた Frank Harris もその例に洩れない。ボジーとワイルドが交際を始めて間もなく世間では妙な噂が流れたので、彼はワイルドに警告したのであるが、耳を貸そうとせず、たゞこう言うだけである。

“All envy, Frank, and malice. What do I care?”

—F. Harris, *Oscar Wilde*, p. 111—

こうして二人の仲は増々深まるばかりであった。それでは悪評の源となり、創作上不利ともなるボジーとの交際を何故続けようとしたのか、そしてその理由は単に同性愛のみによるものなのかこれから考えたい。

### 第三章 人生の芸術化

“Life imitates art far more than Art imitates life”

—O. Wilde, *The Decay of Lying*—

ワイルドの芸術観はその時代の風潮である “Let us return to Life and Nature” を極度に嫌う。「芸術をよく学べは、自然など見向きもしなくなる。自然は欠点だらけで、不完全である。自然そのものが完全であれば、何も我々は芸術など必要ない。『自然の無限の多様性』 (“the infinite variety of Nature”) とは自然を眺める人間のイマジネーションやファンシーによるもの

だ。」と彼は “The Decay of Lying” (1889) で言っている。又人生についても、“Life imitates art, that Life in fact is the mirror, and art the reality” と逆説めいたことを云う。つまり芸術とはそれ自身以外の何物を表現するものでもなく、独立した生命を有している (“Art never expresses anything but itself. It has an independent life”) のだ。従って悪い芸術とはすべて “Life” と “Nature” にもどり、それらを理想の状態にまで高揚することから生じる (“All bad art comes from returning to Life and Nature, and elevating them into ideals.”) ことになる。芸術は人生と無関係であり、極端に言えば、嘘 (不真実で美しいことを言うこと) こそもさに芸術の目的なのだ (“Lying (the telling of beautiful untrue things) is the proper aim of art”)。こういった思想はロマン主義の変形思想として生れてきたのであるが、ここで注目しなければならないことは、以上の「人生が芸術を模倣する」という象徴的な言明は、深い思想を宿していると同時に、ワイルドの表面的な行動にも表われているのである。例えば華美な服装を好み、室内装飾に気を配ったり、花を愛したりするのは人生そのものを芸術化する外面的な徴候なのである。このように彼は自分の芸術的空想を実現可能ならば実行に移そうとしていたように思える。しかも彼が芸術と人生の両面において本質的に求めていたものは、「新しい経験」と「センセーション」だった。

I myself would sacrifice everything for a new experience, and  
I know there is no such thing as a new experience at all.

—Let., p. 184—

I would go to the stake for a sensation.... —Let., p. 275—

「新しい経験」と「センセーション」、つまり “nouveau frisson”<sup>(13)</sup> を追求してこそ、はじめて芸術的な生活をおくれるのであり、たとえその結果破滅することになってもかまわないのである。彼にとっては「芸術生活は長く美しい自殺」<sup>(14)</sup>なのであるから。この芸術観と実生活の境界無視が、彼の奇行の原因と考えることはできないであろうか。

彼が “The Picture of Dorian Gray” (1890) を書いたのはボジーに知り合

う以前のことである。従ってこの作品自体は彼の影響を全く受けていないと言  
ってよい。しかし、結果的に「ドリアン・グレイ」における人間関係と、ワイ  
ルドとボジーの関係が類似しているのは驚くべきことなのである。これは偶然  
の一致ではなく、芸術を人生より先行させた、言い換えれば、人生を自分の芸  
術に模倣させたのである。それでは具体的に「ドリアン・グレイ」の人物関係  
を追って行きたい。主人公ドリアンは貴族出の青年で、極度の美男子である。  
バジル・ホールワードは真面目な画家であるが、彼がドリアンに出会った瞬間  
から、その美しさに魅惑され、性質も、魂も、芸術までも吸収されてしまう  
(“it would absorb my whole nature, my whole soul, my very art  
itself.”)<sup>(15)</sup>そして彼にとって、ドリアンは必要不可欠(“He is absolutely  
necessary to me.”)<sup>(16)</sup>であり、彼の芸術のすべてともなり(“He is all my art  
to me now.”)<sup>(17)</sup>、ドリアンの独占を願うのである。彼を他人にとられることは自  
分の芸術が盗られることを意味するからだ(“Don’t take away from me the  
one person who gives to my art whatever charm it possesses: my life  
as an artist depends on him.”)<sup>(18)</sup>。こうしてドリアンにとり憑かれたバジルは  
結局ドリアン自身の手で殺害されることになる。いわば自己の芸術で身を滅し  
たわけだ。ヘンリーはインテリ貴族であるが、常に逆説的格言によってある時  
は人を魅惑し、ある時は悪影響を与える。彼は一般にワイルドの変身であると  
云われている。彼が友人バジルの紹介によってドリアンを知るが、その瞬間か  
ら純真な青年ドリアンに新しい影響を次から次へと与え、人生の神秘を悟らせ  
る。これまで何も知らなかったドリアンにとって、ヘンリーの言葉や思想はま  
さに驚異であった。彼の体内のこれまで触れられたことのない秘密の弦に触れ  
(“The few words...had touched some secret chord that had never been  
touched before,...”)<sup>(19)</sup>、神秘的な鼓動を呼びおこしていく。ヘンリーの言葉はド  
リアンにとって一種の魔法であり、それからは逃れられない。ただの言葉がな  
んと恐ろしいものなんだろう(“Mere Words! How terrible they were! How  
clear, and vivid, and cruel! One could not escape from them, and yet  
what a subtle magic there was in them!”)<sup>(20)</sup>とも感じられる。ドリアンが

画家と交際している間は本当に純朴な若者であった。しかしヘンリーを知るようになってから、己れの美しさを認識し、そしてその美が年と共に減びることの恐しさを悟るようになる。青春と美こそ最高のものと考えようになったドリアンは死と老と醜の恐怖から逃れる為、現実享楽と頹廃(decadance)の生活に入り、悪の限りを尽し、ついに破滅の道をたどるのである。以上が「ドリアン・グレイの肖像画」の大まかな人間関係でもあるが、これがワイルドとボジーにどれだけのつながりがあるか考えてみたい。ところで先にヘンリーがワイルドの分身であると言った。確かにそれは彼の友人の間でも、学者の間でも一応定説になっている。ところが、ワイルドが Ralph Payne という人物に宛てた手紙に次のような文句がみられるのは注目に値する。

I am so glad you like that strange coloured book of mine: it contains much of me in it. Basil Hallward is what I think I am: Lord Henry what the world thinks me: Dorian what I would like to be—in other ages, perhaps.

—Let, p. 352 (2/12?/94) —

「私は自分ではバジル・ホールワードと思っている。ところが世間ではヘンリーを私だと考えている。ドリアンは私になりたいと思っている人物だ」というのがこの手紙の主旨である。ワイルドがドリアンのようにになりたいと思うのは別に問題はない。ところが、「ヘンリー」≠「ワイルド」と解釈してしまっただけではいけないのである。つまり、世間ではあまりにも「ヘンリー」＝「ワイルド」と云うものだから、それに反発して「バジル」＝「自分」と云っただけである。要するに芸術家としてのワイルドはバジルであるし、話術の天才としての彼はヘンリーなのだ。

さて今一度ワイルドとボジーの出会いを思い出したい。ボジーの年令も美貌も自分が創造した人物ドリアンに類似する。しかも同様に貴族の出だ。彼と交際を続けることは自分の芸術上の理想を実現することになる。自分はヘンリーでもあり、バジルでもある。ある時は彼をインフルエンシスし、ある時は審美主義者としての彼の美貌から刺激を受けようとしたに違いない。それにボジーは

文学愛好者であったから、文学的に彼をインフルエンスしようとしたことは十分考えられる。その証拠として“De Profundis”の引用を挙げてみたい。

What was there, as mere matter of fact, in you that I could influence? Your brain? It was undeveloped. Your imagination? It was dead. Your heart? It was not yet born....

—Let., p. 500—

ヘンリーがドリアンに与えたような危険な影響ではなく、ワイルドの意図したのは主として先輩文学者として後輩を指導するという立場であったが、いずれにしてもそれは失敗に終わったようである。

こうした自分の作品の現実化がもっと表面的に現われているものがある。すなわち、画家バジルがドリアン の肖像画を描き、額縁に入れたように、ワイルドもそれを具体化したのである。この事実は1893年5月、友人の画家 William Rothenstein に宛てた手紙によるものである。

Dear Will, I should like Bosie to be framed. I think a black and white frame with no margin or mounting.

The lovely drawing is complete in itself. It is a great delight to me to have so exquisite a portrait of a friend done by a friend also, and I thank you very much for letting me have it.

—Let., p. 340—

以上の事実から判断して、内面的にも、表面的にも、自己の芸術の人生化を意図したワイルドが、ボジーとの交際においても例外ではなかったと考えられな いであろうか。

#### 第四章 罪の美化

「罪人の見る世界は善人の見る世界よりも、遙かに刺激に富み、誘惑に富んだ、美しい幻影の世界である。」

—谷崎潤一郎「前科者」—

前章においてワイルドの同性愛問題を「人生が芸術を模倣する」立場から考

えたのであるが、この章では彼の「反逆性」「罪への憧れ」の面から考察したい。

Hesketh Pearson はその著 “The Life of Oscar Wilde” (1954) において次のように彼の同性愛問題を論じている。

One feels that he was far more attracted to the idea of doing something outrageous than desirous of fulfilling his nature: and one wonders whether the homosexual strain in him would ever have shown itself if he had not been allured by the concept of ‘sin,’ if there had been no danger attached to it, if it had not seemed to him daring, peculiar, decadant, perverse, rebellious, and even aristocratic.

— p. 264 —

ピアソンの言うのは要するにこうである。「ワイルドが同性愛的行為を行ったのは、本質の欲望（男色）を充足させようとしたのではなく、何か無法なものにあこがれたからである。つまり同性愛が「罪」でないならば、そして、その「罪」にまつわる危険性、頹廃性、反逆性などがなければ、果して彼にそういう気持が起っていたかどうか疑問だ」ということになる。私もこの H. ピアソンの意見に全く賛成したい。もちろん同性愛行為に迫りやった環境なり性質はないことはないが、彼の「罪への憧憬」というバック・アップがなければ恐らく実現しなかったろう。つまり罪より生じる「美的感情が逆に」彼一流の（逆説的な）「道徳的感情を湧起した<sup>(22)</sup>」のである。彼独特の「道徳的感情」とは言うまでもなく美を基盤として生じたものだ。従って人間は善人や悪人に分類されるのではなく、魅力あるか退屈かに分けられるべきだ<sup>(23)</sup>という。そして善人とは通常、正常で平凡な人間に属するのであって、芸術上興味のないものである。逆に、悪人とは芸術の見地からすれば魅惑的で、色彩と変化と新奇性に富み、人のイマジネーションを勧起する<sup>(24)</sup>。又、悪や罪がこのように芸術的、美的見地からすぐれているばかりでなく、社会の進歩にも必要だという。

What is termed Sin is an essential element of progress. Without

it the world would stagnate, or grow old, or become colourless. By its curiosity Sin increases the experience of the race. Through its intensified assertion of individualism, it saves us from monotony of type. In its rejection of the current notions about Morality, it is one with the higher ethics.

—The Critic as Artist, (Eve. Lib.) p. 21—

ここまで来るとワイルドの罪の美化は、根強い英国の倫理観に対する反撓と言ってよい。元来英国を余り好きでなかった彼は至るところで英国の悪口を言っている。伝統に基く単調さから解放し、より高い倫理をきづくためには、個人主義の強烈な主張である「罪」が必要なのだ。従ってワイルドの言う「罪」とは既成の社会通念からではなく、広い視野からすれば、重要な社会性をもっていることになる。だから、「罪」(Sin)とは決して「犯罪」(Crime)とは同一物ではない。‘Crime’は‘Sin’とはちがって卑俗なものをさすからだ。

All crime is vulgar, just as all vulgarity is crime. It is not in you, Dorian, to commit a murder.

—The Picture of Dorian Gray (Evr. Lib.) p. 245—

ワイルドにとっては、殺人や強盗などは Crime であるが、同性愛はそうではない。それを非とする英国法ならび社会通念がおかしいのである。彼の同性愛的行動はそれを禁じる英国法、国民の慣習、既成概念へのレジスタンスのあらわれと言ってよい。

「罪の美化」という己れの芸術信条と時代への反撓が同性愛という、いわゆる「罪」を犯すことによってそのはげ口を見出したのである。いずれにせよ、この章も終局的には前章の「芸術信条の実生活化」と関係を持っていることを認めざるを得ない。

## 第五章 同性愛患者としてのワイルド

“A woman’s face with Nature’s own hand painted, Hast thou the

Master Mistress of my passion,”

—Shakespear, Sonnets 20—

これまではワイルドの行為を芸術理論と社会性という問題に原因を求めたため、あたかも彼の本性には通常の同性愛患者のような要素がないかのように解釈される恐れがないとも限らない。それで、この章では、これまでの内容とは別個に、つまり、彼の芸術観や社会観を一応除外して、心理的立場から考えてみたいのである。それには、彼の幼年時代から少年時代を振りかえってみる必要がある。

ワイルドがまだ Dublin Trinity College のに通っている時(1871—74)のことだが、ある朝父が兄の Willie に一通の手紙を手渡した。それは一人の女性からであり、内容は自分は妊娠したが、それは貴殿(Willie)の責任である、というものだ。それでは彼は重々しく次のように父に尋ねた。「あの、お父さん。あなたはどうか処置するつもりでしょうか」<sup>(25)</sup> 実に変な会話だが、ワイルドの兄 Willie というのは子供時代から弟と性格が全く異っていた。弟(Wilde)は運動は全然嫌い、友達も少く、読書に耽けるといふ風な性格であったのに対し、兄(Willie)は友達間でも人気があり、ゲームもやり、話しもうまく、先生にも弟より出来がよいと思われていた。<sup>(26)</sup> こういうわけで、兄の方は必然的に女性にも好かれ、関係も多かったのであろう。ところで、この Willie が女性問題で父に妙な質問をしたのは、父もその道では相当な人物であったから、先輩としての意見を尋ねたのであると思う。父はダブリンでは有名な医師で、ナイトの称号を持つ名士であった。この父が患者である若い女性と関係し、裁判沙汰になった話も有名である。<sup>(27)</sup> このようにワイルドの近親者たちは女性関係に関してかなりやり手であったと考えられる。さて、こうした身内の性癖とワイルドの同性愛とどういう関係があるのだろうか。そのためには心理学者フロイドが診断した例をここに引用しなければならない。「私はかつて、ともに強い性的衝動を持った双生児の兄弟と知り合った。その一人は女運にめぐまれ、夫人や少女たちと無数の関係をもった。もう一人も初めは同じ道を歩いていたが、のち次第に兄の領分を侵し、似ているために人目を憚る折々に兄と間

違えられることを不快に思うようになった。そこで彼は同性愛者になることによって自分のピンチを脱した。彼は女を一切兄に任せてしまって、そんな形で兄を避けたのである。別の時、私はある若い男の治療に当たったことがある。この男は美術家で、明かに両性的素質を持っていた。この男の場合、同性愛は仕事の停顿と時を同じうして始まった。彼は婦人と仕事とを同時に棄てた。分析治療の結果、彼は仕事と女性への愛情をふたつながら取戻したが、女性関係と仕事の二つの面における障碍（というより諦め）の心的原因は、父親に対する懼れにあることが判明した。彼は頭の中ですべての婦人たちは父親のものと考え、父親とのいさかいを避けるために、おとなしく男たちのもとへ走ったのであった。<sup>(28)</sup>これら二つの症例とワイルドの場合と一致するというつもりはないが、かなりよく似た印象を受けざるを得ない。性格の異なる兄の行動、父の大規模なスキャンダルが子供時代と思春期のワイルドの性的本能（sexual nature）にかなり大きな影響を与えたことは十分考えられるのである。それに加えて、次の事実も忘れてはならない。ワイルドは次男であるが、彼が生れる前、母親は大そう女の子を欲しいと思っていた。ところが、期待に反して彼が生れたのである。母親の失望は大きかったが、そのショックを軽減するため、ワイルドに女の子の服装をかなり大きくなるまで着せたという話がある。このこともそれ以後の彼の性的本性に少なからず影響を与えたと考えてよい。<sup>(29)</sup>少なくとも女性親に支障をきたしている。もちろん彼は女性とはよく交際した。しかしそれは性愛的なものではなく、上流社会の婦人を通して、社交界に出入りしたかった為である。900頁からなる彼の書簡集を調べても女性へのラブレターらしいものは見つからない。もちろん結婚以前にも他の女性にプロポーズした事実はあるが、どうも女の財産目当であったように察せられるし、<sup>(30)</sup>30才で結婚したが、その直前は経済的に困っていたと一般に言われている。コンスタンスと婚約した当初の彼の手紙はなるほど彼女を愛している旨をよく表わしているが、<sup>(31)</sup>その内容は半分は真実で半分は儀礼的と解せられる。又結婚してからも外泊などがかなり多かったことから判断しても、女性に対する気持は普通の男と大分違っていたように思える。

以上の諸点から判断すれば、理由は普通の同性愛者とは異なるにしても、やはり、彼の本性はその傾向が秘んでいたことは否定できないようである。

## 第六章 ワイルド自身の弁明

“How like Eve’s apple doth thy beauty grows, If thy sweet virtue answer not thy show.”

—Shakespear, Sonnets 93—

栄光の座から破滅に導いたボジーとの関係をワイルド自身どう思っていたのか、自分でも同性愛と認めていたのかどうか考えてみたい。ボジーとの関係についてのワイルドの考えを最もよく表明しているのは何と云ってもやはり *De Profundis* であろう。しかし全盛時代のワイルドの心情と *Reading Gaol* に入ってからこの作品を書いた時のそれとは大きな開きがある。つまり前者においては余りにも得意になりすぎ、自分のやっていることを冷静に考える余裕がなかったように思える一方、後者では環境の性ではあろうが、反省と自己弁護に満ちすぎている。云い換えれば、ワイルドの真の意見がどちらによりよく表われているか決定するのは難しいのである。彼が二年間の刑期を終えて世に出ても、牢獄に居る時の如く、反省に満ちた生活をおくっていたならば、反省の強さを物語ることになろう。しかし、再びボジーとの交際を続けたのである。この事実は彼の心理を理解するのを一層困難にしているように思える。確かに普通の人間ならば自分をあれほどの栄光の座から無と恥辱に追いやった男などとは二度と交際はしないであろう。ところが、彼はそれを復活した。その理由は一見複雑の様相を呈している。しかし結局のところ、彼は誘惑に弱かっただけなのだ。‘I can resist everything except temptation.’<sup>(32)</sup> がすべてを語っているのではないだろうか。彼は弱い人間だった。有罪を宣告される以前、つまりワイルドとボジーが交際を続けている時、彼はこの若者の余りにも勝手な言動に腹を立て、幾度となく彼を遮断しようとした。しかし出来なかった。ボジーがインフルエンザで寝こんだ時、ワイルドは献身的に看護した。彼の無理な注文物を手に入れる為に外出する以外はずっとベッドにつききりであっ

た。こうして彼の病気は治ったが、今度はワイルドが彼の風邪をうつされ、寝る羽目になったが、彼は一度も看護することなく “When you are not on your pedestal you are not interesting.” などと云って出歩いてばかりいた。<sup>(33)</sup> こういう態度に落胆したワイルドは彼を再び自分の家に入れたいし、会いもしないと誓ったのであるが、彼の兄 Lord Queensberry が銃の暴発によって不慮の死を遂げるといふ事件が起きた（1894年10月18日——既出——）。ボジーの消沈ぶりに同情したワイルドは彼を慰めるうちに又もとの交際をつづけていたのである。又、こういう事実もある。ボジーの母がワイルドに手紙を出した。その内容は、ボジーが親兄弟を侮辱したり、虚栄をはったり、金銭問題にルーズなのはワイルドの責任だといふものである。<sup>(34)</sup> ワイルドは自分の釈明をしつつ、これ以上彼とつきあうことは創作面その他で支障をきたすことがはなはだしいから、一際絶交しようと誓った。一方その時外国にいるボジーは頻繁に手紙をよこしてきたが、ワイルドは相手にしなかった。ところが、おかしなことに母親が再び息子との交際を続けてやってくれと頼んできたのである。ボジーの方もワイルドの妻に口をきいてくれるようたのんだりしていた。こうして、あいまいなうちに再度関係を続けたのである。<sup>(35)</sup> 今一つ見落してはならないことは、ワイルドの文学者としての責任感である。前にも述べたとおり、大学においても、芸術面においても大先輩である彼は、やはり、若い文学青年を適切に指導するという責任を感じていた。従って、ボジーという人間の欠点を強く感じ、彼とつき合い続ける場合の創作上の不利を十分知りつつ、彼を捨てることができなかつたのである。いわば若い芸術家の芽をつみ取りたくはなかつたのだ。それを示すものとして De Profundis を引用したい。

... no matter what you wrote or did, you were absolutely and entirely devoted to me. I did not want to be the first to check or discourage you in your beginnings in literature.<sup>(36)</sup>

<sup>(37)</sup> これは「サロメ」の翻訳についての言及であるが、文学者としてのワイルドの思いやりを伺うことができる。

このように彼等二人が交際を続けた理由は色々であろう。しかし、それは終

局的にはワイルド自身の弱さに帰着すると言ってさしつかえない。

I blame myself without reserve for my weakness. It was merely weakness. But in the case of an artist, weakness is nothing less than a crime: when it is a weakness that paralyses the imagination.

—Let., p. 427—

確かにワイルドは誘惑に弱い人間であったのだろう。しかし弱かったというのはいわば結果論であって、その時の理由はともあれ、ワイルドをひきつける力がボジーにあったことは認めざるを得ない。簡単に云えば娼婦的魅力がボジーにあったと云える。

「獄中記」において、ワイルドはボジーの自分に対する狂気じみた愛情について幾度となく述べている。彼はワイルドに「捨てられない」ためには必死を尽していたようだ。ところが、この作品では、ワイルドは自分も同様に彼を「愛して」いたとは決断して書いていないのである。(ひとたび有罪と決ったからには、たとえ何と云われてもよいわけだから、本当に「愛して」いたのなら、そう書いてもよさそうなものである)そうすると、疑問となってくるのは、ワイルドがボジーに与えた、いわゆる「ラブ・レター」だ。たとえばこの小論の第二章で引用したようなものを彼はどう釈明するのか。特に“My own Boy...”で始まるあの手紙は裁判の時に証拠物件として持ち出されたほどのものだから、彼自身言及しないわけにはいかない。裁判の時にも問題にされ、我々も気になる言葉“those red rose-leaf lips of yours ... for madness of kisses”(「君のあの紅いバラの花びらのような唇は私に気狂いみたいに口づけをしたく思わせるばかりでなく....」)について彼は次のように弁明している。

You send me a very nice poem, of the undergraduate school of verse, for my approval: I reply by a letter of fantastic literary conceits: I compare you to Hylas, or Hyacinth, Jonquil or Narcisse, or someone whom the great god of Poetry favoured, and honoured with his love. The letter is like a passage from one of Shakespe-

are's sonnets, transposed to a minor key. It can only be understood by those who have read the Symposium of Plato, or caught the spirit of a certain grave mood made beautiful for us in Greek marbles.

—Let., p. 440—

先の手紙 (“My Own Boy...”) はボジーが大学生の時にワイルドにおくって来た詩についての返事なのだから「文学的気どり」(‘literary conceits’) が文体に見られるのは当然だ。しかも、この手紙はある程度シェイクスピアのソネット風になっている。つまり、この手紙に見られる ‘sensual’ な表現は男色とは関係なく、文学的、詩的比喩だというのがワイルドの釈明である。なるほど、ワイルドの手紙にはボジー以外の人に宛てたものでも韻を踏んだもの、詩的表現を使ったもの、<sup>(39)</sup>ソネット形式を推せんするもの<sup>(40)</sup>などが時々みられる。従って文学を愛好する若い美男子に書いた手紙としては、ワイルドの性質上決して不自然ではないわけである。フランク・ハリスはこの手紙も結局は「芸術家の手紙」 (“an artist’s letter”)<sup>(41)</sup>なのであって、「散文のソネット」として書いたものだ (“Mr. Wilde had described his letter to Lord Alfred Douglas as a prose sonnet.”)<sup>(42)</sup>と言っているが、誠に当を得た意見であり、ワイルド自身の釈明に一致していると言える。

× × × × ×

以上のように芸術家の同性愛問題を考える時、色々な困難に遭遇するため、簡単な結論を出すことは出来ない。彼等の行動は普通の同性愛者のそれとは違って、色々な条件、たとえば、芸術観、歴史観、倫理観などによって影響を受けつつ複雑化していくのであるから、簡単に割りきれないのである。逆に、彼等のこのような問題は彼等の芸術や思想を解釈する上に重要な働きをなしているとも云えるであろう。

## Notes

- (1) 日付は明確にはわからないがその年の一月中のことであると推定できる。
- (2) Lionel Johnson, 詩人である。
- (3) Hesketh Pearson, *The Life of Oscar Wilde* (1954), p. 267
- (4) このユーゴーの言葉は Walter Paterの“*The Renaissance*”の「結語」に引用されているもので、彼は “We are all under sentence of death but with a sort of indefinite reprieve” と訳している。
- (5) 22才
- (6) *Let.*, pp. 30-31. To William Ward (3/31/77)
- (7) ‘blue blood’ “*The Canterville Ghost*” (1887), Chap. V
- (8) 「若さ」ということもワイルドを惹きつける条件の一つであつた。彼の言に従えば、「若い人からしか物は学べない」のだそうだ。(cf. *Let.*, p. 181)  
又 “An Ideal Husband” に次のようなセリフもある。  
Lord Goring. I am far too young.  
Lord Caversham. [Testily] I hate this affectation of youth, sir. It is a great deal too prevalent nowadays.  
Lord Goring. Youth isn't an affectation. Youth is an art. [Act IV]
- (9) この手紙は裁判の時に証拠物件として提出された。
- (10) 日本教文社版、フロイド選集第14巻「愛情の心理学」 p. 180
- (11) Oueensberry 第七 候爵 (1818—58) は射撃事故 (原因不明) で死亡し、その末子 Lord James Edward Sholto Douglas (1855—91) もホテル (Euston Hotel) のどを切つて自殺している。又ボジーの父も狂犬のような立振舞をする。こういう異常な家系と、両親の離婚問題を分析すれば、ボジーの心理状態のいくらかは判明するだろう。
- (12) 心理学者フロイドは「ドストエフスキーと父親殺し」という論文の中で次のように述べている。「父親が冷酷で乱暴で残忍であつたとすると、超自我はこれらの諸性質をこの父親から受け継ぐ。そしてこの超自我と自我との関係の中に、受動性——これこそまさに抑圧されるべきものであるが——再び顔を覗ける。すなわち、超自我はサディテイッシュなものとなつたのであり、これに反して、自我はマゾヒスティッシュなもの、その根本においては女性的、受動的なものとなる。」(日本教文社版、フロイド選集第七巻「芸術論」p.340—1) ボジーがワイルドとの関係において、完全に女性的の立場にあつたことや、ワイルドが病気になつた時、急に彼を虐待したいわゆる、サディスティッシュな行動をこのフロイドの理論がよく説明してくれると思う。
- (13) *Let.*, p. 275
- (14) *Ibid.*, p. 185 “Sometimes I think that the artistic life is a long and lovely suicide, and am not sorry that it is so.”

- (15) *The Picture of Dorian Gray* (Everyman's Lib.) p. 75
- (16) *Ibid.*, p. 78
- (17) *Ibid.*, p. 78
- (18) *Ibid.*, p. 82
- (19) *Ibid.*, p. 85
- (20) *Ibid.*, p. 86
- (21) *The Picture of Doian Gray* を指す。
- (22) 谷崎潤一郎「少年の脅迫」中央公論社刊「谷崎潤一郎全集第五巻」 p. 225-6
- (23) *Lady Windermere's Fan*, Act I. "It is absurd to divide people into good and bad. People are either charming or tedious."
- (24) *Let.*, p. 259 "Good People, belonging as they do to the normal, and so, commonplace, type, are artistically uninteresting. Bad people are, from the point of view of art, fascinating studies. They represent colour, variety and strangeness. Good people exasperate one's reason; bad people stir one's imagination.
- (25) H. Pearson, *The Life of Oscar Wilde* p. 23
- (26) *Ibid.*, p. 18
- (27) Frank Harris, *Oscar Wilde* の Chapter I はこの問題について述べている。
- (28) フロイド選集第14巻「愛情の心理学」 p. 165
- (29) H. Pearson もその意見である。 *The Life of Oscar Wilde* p. 17 参照
- (30) 彼が結婚する以前に Charlotte Mantefiore (1855-1933) という女性に求婚し、ことわられた事実がある。拒絶された夜、彼は彼女に一片の note を手渡した。それには "Charlotte, I am so sorry about your decision. With your money and my brain we should have gone so far." (*Cet.*, p. 60) とあるから、やはり財産をあてにしていたことがわかる。
- (31) *Let.*, p. 153, 154, 155 参照
- (32) *Lady Windermere's Fan*, act I
- (33) *De Profundis* より, *Let.*, p. 439
- (34) *Let.*, p. 433
- (35) *Ibid.*, p. 434
- (36) *Ibid.*, pp. 432-3
- (37) ワイルドがフランス語で書いた「サロメ」を英訳したのはボジーなのである。
- (38) *Let.*, p. 176 など
- (39) *Ibid.*, p. 184 など
- (40) *Ibid.*, p. 238
- (41) F. Harris, *Oscar Wilde*, p. 108
- (42) *Ibid.*, p. 143

### 参 考 書 目

- Hesketh Pearson, *The Life of Oscar Wilde* (1954), Methuen & Co.  
Frank Harris, *Oscar Wilde* (1916), Dell  
Epifanio San Juan, Jr., *The Art of Oscar Wilde* (1967), Princeton University Press  
Cecil Hewetson, *Wit and Wisdom of Oscar Wilde* (1960), Gerald Dackworth & Co.  
Rupert Hart-Davis, *The Letters of Oscar Wilde* (1962), Rupert Hart-Davis Ltd.  
Richard Ellman & Charles Feidelson, JR., *The Modern Tradition* (1965), Oxford University Press

### 使 用 作 品

- The Critic as Artist.*  
*The Picture of Dorian Gray*  
*The Soul of Man under Socialism*  
*Lady Windermere's Fan*  
*The Importance of Being Earnest*  
*The Ballad of Reading Gaol*  
以上 Everyman's Library.

- Salome*  
*An Ideal Husband*  
以上 研究社英文学叢書

- The Canterville Ghost*  
*The Sphinx without a Secret*  
*The Model Millionaire*  
以上 英宝社

- Lord Arthur Saville's Crime*  
南雲堂

尚、獄中記 (*De Profundis*) は Rupert Hart-Davis 編纂の *The Letters of Oscar Wilde* を利用した。又 “*The Decay of Lying*” は “*The Modern Tradition*” に収録されたものを利用した。

ワイルド以外の作品

- Shakespeare, *Sonnets*  
Shakespeare, *Romeo and Juliet*  
Pater, *The Renaissance*  
谷崎潤一郎全集第五卷～九卷 (中央公論社版)